

研究概要

1. 研究名称 または課題名テーマ等

IgA 腎症の 40 年腎予後と年代毎の治療内容・治療成績の検討

2. 研究責任者(当院)

所属：腎臓内科

氏名：藤井隆之

共同研究の場合は代表機関 及び 代表者名

機関名：なし

代表名：

3. 分担研究者

所属：腎臓内科

氏名：鈴木 理志、田中宏明、寺崎紀子、森本真有、越坂純也、山内伸章、面大地、松永宇広

4. 研究対象者

1980 年 01 月 01 日～2023 年 3 月 31 日の間に、聖隷佐倉市民病院(旧国立佐倉病院から継続)で腎生検を行い IgA 腎症と診断された方。

5. 研究の必要性

IgA 腎症は、慢性糸球体腎炎の代表的な疾患であり、自然経過では 10 年で 85%、20 年で 40% が末期腎不全になると報告されている。時代の変遷とともに治療法も変化し、腎生存率は改善していることが想定され、実際 IgA 腎症を代表とする慢性糸球体腎炎での透析導入率は年々減少してきている。しかしながら、同疾患は糖尿病、高血圧に次いで末期腎不全に至る 3 番目に多い疾患であり、本邦の難病疾病にも指定され、年間 5000 例以上もの新規発症が報告されている。

IgA 腎症の治療法に関しては、1980 年代は抗血小板剤による治療が主体で、その後 1980 年中盤からはレニン・アンギオテンシン系阻害薬が使用されるようになり、1990 年代になると蛋白尿が 1g 以上の重症例に対してはステロイド製剤が使用されるようになった。2000 年以降では、本邦では扁桃腺摘出とステロイド大量静注療法が行われるようになり、最近では進行予防ではなく、寛解を目指す治療として早期の段階から治療されるケースもみられるようになった。このような治療法の変化を背景に、2014 年に本邦での IgA 腎症の 30 年腎生存率が約 50%と報告された。我々の施設でも 1980 年代から現在に至るまで約 1100 例以上の IgA 腎症の症例を経験しており、ここ 40 年間の腎生存率を解析するとともに、時代毎の患者背景、尿・血液・病理検査、治療法と治療成績との関連を解析することにより、より効果的な治療法、治療介入時期など今後の診療に役立つものと考えている。

6. 研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

本研究は後方視的研究であり、参加個人への影響はありません。ただし 40 年の時代経過のなかで治療法も変化しており、年代毎の患者背景や治療法などを解析することにより、現在での治療介入の問題点を抽出し、年齢や臨床データをもとにより効果的な治療介入時期、治療法を見出すことが可能となり、将来的に診療に還元できるものと考えている。

7. 対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1151

担当者氏名：藤井隆之

対応時間：9:00～17:00

共同研究において専用窓口がある場合

なし